「ワイガヤ」

酔っぱらい
Wojisan

一

今年度、ようやく「ワイガヤ」を導入することができた。

「ワイガヤ」というのは私の学級用語。自動車会社のホンダが、肩書き関係なしにアイディアを出し合う会議をそう呼んでいることから頂いた。

私の学級の「ワイガヤ」は、子どもたちで考え合ったり教え合ったりして課題を解決する受業易面を言う。

正式名称は『学び合い』

単なる学び合いや「学び合い」ではない。

二

この考え方（方法ではないのだ）を知ったのは四、五年ほど前。すぐには取り入れられなかった。

それは、なんとかして逆転現象を生じさせ、できないと思われている子に対する周りの子の見方を変えたいと模索している私には、この考え方は、子どもたちの互いの見方の固定化につながるのではないかという懸念があったからだ。

関連書籍を読み、東京や高知などで開かれた研修会に参加した。講演や報告を聞き、児童役の体験もした。しかし取り入れることができたのは今年度になってからだ。

今年、思いの外早くに「学級になった」ので、思い切って挑戦してみた。

ドキドキした。同時にワクワクもした。

趣旨を説明して、いよいよ開始。

…。

驚いた。

まるで静岡の築地久子学級（若くて知らない人、ごめんなさい）のような光景が目の前に展開したのだ。（もちろん、光景のみ）

結果、従来の私の授業では得られなかったボトムアップにつながったのだ。

三

算数の授業で具体的に述べる。

この日の学習は、ドリルの割合の文章題四問を完璧に分かるという目標だ。

まずは独りで問題を考える時間をとる。

子どもたちは教科書やノートを見ながら問題に向かっている。

頃合いを見計らって「○分まで、ワイガヤです」と私が言う。（この前に正答を告げる場合が多い）

すると子どもたちは席を離れ、教室の中のあちらこちらで友達と考え合う。

友達の机を囲んで考え合う子、黒板を使いながら考え合う子とさまざまだ。独りで考えたい子は納得できるまで独りで考え、その後、友達と合流する。

多くは三人前後のグループになっているが、そのメンバーは固定していない。あるところで説明し合いが終わると別れ、違うグループに行ってまた話し合う。逆に、ずっと同じメンバーで考え合っている子もいる。

「説明を聞いただけで分かったと思うのは、本当に分かったことにはならない。本当に分かるということは、自分が他の人に説明ができることだ」と日頃から口を酸っぱくして言っているので、聞くだけでは終わってはいない。

始めた頃は、友達に聞いたことを一言一句ノートに書いて丸読みしていた子がいたが、今ではそういう子はいない。たとえ最後まで言えなくとも、自分の言葉で説明をしようとしている。

私はこの間、グループ間をうろうろしながら「それ、分かりやすい説明だね」とか「その質問、鋭いね。やるね」と言うだけだ。教えない。

ICレコーダを置いた。

「じゃあ、これ足すこれ？」

「でも、0.4と小数にするんじゃないん？」

「でもなんで、この答えにこれ足すん？」

「ああ、去年より多くとれたと書いてるもんな？」

算数が苦手だと言っている子がこのように友達に質問をしている。この質問言は私の一斉授業では決して表には出てこない。

「このへんまでは完璧に分かるんやけど、ここからはまだなんよ」というつぶやきや「あ～。分かった。あっ、でも、もう一回言って」などの声も聞こえる。

教室のあちらこちらで、このようなつぶやきや尋ね合いがおこなわれる。ボトムアップにつながるはずだ。

子どもたちの表情にも「ワイガヤ」をおこなわない授業では見られない真剣さがある。これを目の当たりにすると、私の従来型の授業はいったいなんだったのだとさえ思えてくる。

それだけにとどまらない。何人かの子が「友達ときょりが近くなったような気がします」と述べているように、人間関係も豊かになる。

そして嬉しいことに、めきめき力をつけ、100点をとりだした子がいる。その子たちは「ワイガヤ」のグループの中で、かつては聞くことが主体だったのが、今では、説明をすることが明らかに多くなっている。私は、その子たちのことを全体に取り上げる。

この変わりぶりを認め合うことは、周りの子にも影響を与えることになる。学級が変わり始めたという手応えを感じる時だ。

四

私に残された時間が少なくなってきているのを実感する近ごろである。

その時点まで私が子どもたちにどんな力をつけたいか、その時の子どもたちの理解度、そして単元内容に応じて、一方向の教え込みの授業、従来型の授業、討論の授業、そしてここに取り上げた「ワイガヤ」など、さまざまな授業形態を取り入れ、子どもたちに力をつける方策を求めていきたい。

なお、「ワイガヤ」の正式な考え方は「西川純」や「『学び合い』」・「上越教育大学」で検索してください。

「ワイワイガヤガヤ」でも真剣そのもの

（小学校　教諭）